

第 26 回 暑さ寒さも彼岸までという「彼岸」とは日本特有の文化

1 「暑さ寒さも彼岸まで」というこの季節のお話

やっと春らしい気候になってきました。先日までは、寒かったり暑かったり、というような不安定な気候でしたね。この時期は、着る服が困ります。朝は寒く昼は暑くなってコートなどが荷物になりますが、夜になるとまたかなり冷え込んでしまいますね。私の場合は、お酒に酔っていたりするので、夜の寒さに気付かないときがありますが。

さて、日本ではこの季節のことを「三寒四温」といいます。文字通り三日間寒かったら、次は四日間暖かい春らしい陽気になるという感じです。冬物もしまえないし、でも急に寒くなるので、上に羽織の 1 枚を出しておかなければならない。そんなことを思わせる言葉ですね。

しかし、この「三寒四温」という言葉、もともとは中国東北部や朝鮮半島における言葉だそうです。シベリアの方から吹いてくる風が、寒くなったり暑くなったり、そのような感じで体調を壊しやすいということで使われる言葉だそうです。ですから、本来はこの時期の言葉ではなく、1 月や 2 月の季語として使われるのですね。そして手紙などに使われる場合は、「相手の体調をいたわる言葉」として、「寒暖の差が激しいですが、体調を崩していませんか」というような感じで使うそうです。

元々の言葉が、日本に来て、同じ言葉なのに意味が少し違ってくるという良い例の一つです。特に、時代に合わせて、「服を選ぶのが大変」とか、そのような感じで、テレビの天気予報などで使われると、元々の意味との違いを感じます。

しかし、この「三寒四温」が元来日本の言葉ではないとすると、日本ではこの季節にどのような言葉を使っていたのでしょうか。

皆さんも聞かれたことがあるのではないかと思います。「暑さ寒さも彼岸まで」そんな言葉でこの季節を表現していたのです。この言葉は、「冬の寒さも、春のお彼岸までで過ごしやすくなるし、また夏の厳しい暑さも、秋のお彼岸を過ぎれば凌ぎやすくなる」というような形です。

大陸の言葉は、その時に発生している現象を表す言葉で、その現象をいうことで相手のことを気遣ったり、その現象に関して対策を打ったりというようなことになります。元々、中国東北部や朝鮮半島は騎馬民族の人々の地域で、あまり農耕とかは行っていませんので、自然の現象そのものに打ち勝つという感じがあります。しかし、日本の場合は農耕民族ですし、また、自然や自然と一緒にいる神々と「ともに暮らす」という感じが非常に強いので、このような寒さや暑さを表現するのでも「暮らしやすくなるまで待つ」「厳しい自然を耐え忍ぶ」というような感じが強くなります。「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉には、そのように「耐え忍んでいれば徐々に和らいでくる」というようなニュアンスが入っています。そして、そのような意味から「辛いこともいずれ時期が来れば去っていく」という意味の諺として用いられることもあるようです。

このような、普段何気なく使っている「気候」を示す言葉の中にも、その国の文化や自然に対する考え方というのが入っています。

イギリスでは、初対面の人と話す時に「気候や天気の話をしなさい」といいます。気候や天気は宗教や民族に関係なく、その場にいる人、誰でも同じことを体験していますから、話題も作りやすいですし、また、共通の認識を得やすいといえます。しかし同時に、天気や気候というのは、その人の生まれ育った場所やその土地の文化、あるいは、民族性などによってその表現方法が変わります。毎日のことですから「当たり前」と自分で思っていることが、自分の地方独特のことであって、ほかの人と違って驚くことがあります。天気や気候のことを外国の人と話していると、どうしてもお国柄なども出てきてしまいますね。イギリスの「天気の話をする」というのが、そのようなことまで含んでいるかどうかはわかりませんが、誰でもがする気候の表現や会話の中でこそ、その人の性質や文化が色濃く出るのかもしれない。

2 お彼岸と波羅蜜多という仏教用語

さて、では日本の表現の中に出てくる「彼岸」とは一体何でしょうか。暑さ寒さを表現する言葉ではないんですね。

仏教の原典が書かれているサンスクリット語で「パーラミター」という言葉があります。これは、「最高の」という意味のパーラムという単語に接尾語を付けたもので、日本では「波羅蜜多」と書かれます。般若心経の冒頭にある『摩訶般若波羅蜜多心経』というところに書かれている言葉です。この「波羅蜜多」は、音にそのまま漢字を当てただけです。そこで、当然に意味は違うということになります。仏教では「最高の事」とは悟りを開くことですね。「彼方に行った」すなわち此岸（迷い）から彼岸（覚り）に到る行と解されます。

ちなみに、この「最高の事」要するに「波羅蜜」は、さまざまあります。仏教の中では、ブッダになりうる資質を獲得するために実践する6つの項目のことを「六波羅蜜」といいます。

布施波羅蜜 - 檀那（ダーナ）は、分け与えること。具体的には、お布施です。たくさんお布施をすることの人を「旦那」というのはこの言葉が語源といわれています。

持戒波羅蜜 - 尸羅（シーラ）は、戒律を守ること。在家の場合は五戒または八戒を、出家の場合は律に規定された禁戒を守るとを言います。この戒律を守れなくて妖怪になってしまったのが「猪八戒」ですね。

忍辱波羅蜜 - 羼提（センダイ）は、耐え忍ぶこと。

精進波羅蜜 - 毘梨耶（ビリヤ）は、努力すること。

禪定波羅蜜 - 禪那（ゼンナ）は、特定の対象に心を集中すること。

智慧波羅蜜 - 般若（ハンニャ）は、諸法に通達する智と断惑証理する慧のことです。

この「六波羅蜜」のことを、意味の方から「六度彼岸」とも呼ばれることがあります。

さて、「波羅蜜」ということは仏教の中では非常に重要なことになります。「彼岸」の場所に至り、そしてその悟りの世界の先にあるのが「涅槃」だとされています。

このように見ていると、「彼岸」とは完全に仏教の事ですし、仏教の用語であるために、仏教の行事であると考えられます。当然に、インドや中国でも同じような行事が行われていると考えてしまいます。地域が違うだけで「三寒四温」と同じようなものではないか、その様に思ってしまうですね。

しかし違うんです。実は、「彼岸」という行事は、実は日本にしかないものです。ほかの仏教の国では「お彼岸」という風習はありません。ですから、この季節の「暑さ寒さも彼岸まで」という言い方は、日本独特なんですね。

では、どうしてこれだけ仏教用語ばかりなのに「お彼岸」は日本独特の風習なのでしょう。

3 お彼岸と西方浄土

「彼岸」という言葉は、仏教の用語です。しかし、この仏教の考え方も地域や文化によって様々な変化を遂げることになります。日本では、仏教など様々な先進文化が日本の西である「唐」「天竺」から伝わってくるという事から、「唐」「天竺」というのは日本人の多くの人考える、未来都市や、あるいは仏教の教えにある極楽浄土があると考えられていたのです。

この思想は「西方浄土」という思想になってその中に入っています。この西方浄土の思想は、自然の動きに従って、広く庶民の間まで広まるようになりました。太陽は毎日東から昇って西に沈みます。大体の人は、今も昔も朝日、それも日の出を見ることはありません。太陽が昇ってから明るくなって目を覚ますからですね。特に、目覚まし時計などのない当時の人々は、自然に従って生きているということになれば、そのようになってしまうのです。逆に日が沈むときはほとんどの人が起きています。そして太陽が沈むときに、赤くそして太陽が大きくなって、徐々に西側に沈んでゆく姿を見ます。何とか、その太陽の方にある神の国に行こうとすると、海に当たり、そして日が沈むときに水の上に日

の光で帯状に「光の道」ができ、その光の道が太陽までつながるように見えるのです。

昔の人は、この「光の道」を通ると「西の浄土」に行けると信じていました。昔の人にとっては光は神様が出しているもので、極楽浄土は光があふれる場所であると考えていたのです。また、これは仏教ばかりではなく、日本の天皇の先祖は天照大御神、要するに太陽の神様です。ですから日本の古来からの宗教感覚でも太陽の中に神の国があるというような思想は馴染み深かったものと思います。

逆に「太陽がない時」要するに「闇に閉ざされた時」というのは、基本的に神の加護のない時間ということになります。そのために百鬼夜行など妖怪変化や幽霊の時間ということになるのです。

太陽の動きというのは、東からきて、神の加護を日本にもたらした後、西にある神の国極楽浄土に帰ってゆくというように考えられていたのではないのでしょうか。

さて、太陽というのは、「東から昇って西に沈む」のですが、「真東」「真西」ではありません。ところが「真西」に太陽が沈むときが年に2回あります。これが「春分の日」と「秋分の日」要するに、「春のお彼岸」と「秋のお彼岸」なのです。

日本のように西側が海であって、また、春分の日・秋分の日に太陽が真西に沈むような状況でなければ、実は「お彼岸」の法要というような習慣にはつながらないのです。特に、中国東北部の騎馬民族などは、自分の拠点が高距離で移動してしまうので、日本人のように一か所に長く住んでその気候になじむということがありません。そのために「三寒四温」と「暑さ寒さも彼岸まで」の違いが出てきてしまうのです。

このように「お彼岸」は、日本の「光」特に「太陽」に対する信仰心と、一方で、仏教の「波羅蜜」という考え方が融合した、完全に日本で生まれた習慣ですし、また、日本の様々な習慣や考えがなければ、このような発想にはならないのです。

4 お墓詣りと牡丹餅

では、「お彼岸」は、どのようなことをするのでしょうか。

お彼岸にする事とは「家族そろっての墓参り」「牡丹餅（秋はお萩）のお供え」などを家族で食べる、というような場合もあります。そのそれぞれについてみてみましょう。

「家族そろっての墓参り」は、このお彼岸という事が仏教の行事であることを考えれば当然ですね。

太陽が真東から昇り、真西に沈む、ちょうど、これは、私たちが今住んでいる世界「此岸」と「彼岸」が正面に向き合う関係になります。ちなみに「此岸」のことを、サンスクリット語では「サハー」といいます。この音に漢字を当てると「娑婆」となるのですね。真西に太陽が沈み、そして、太陽から延びる光の道が真西につながるこの日は、極楽浄土に最も近くなると考えられています。そのために、この日に先に極楽浄土に行ったご先祖様をお参りし、そして、極楽浄土に導かれるようにという意味を込めてお墓参りをするのです。自分が「彼岸」に近づけますようにというようなこともありますし、また、向こうからこちらの様子を見に来るので、顔を見せるというような意味もあるのではないのでしょうか。何しろ道がつながっているのですから、さまざまな意味が出てきます。ちょうどお墓がその道につながる場所というような感じがあるのではないのでしょうか。

「牡丹餅のお供え」というのもお彼岸の特徴です。

これには、いくつかの説があります。1つ目は先祖におはぎを供え、近所へおすそ分けすることが徳を積むとされているから、ということです。これは「六波羅蜜」の中の布施波羅蜜を行うことによって、波羅蜜を自分で体現するというようなものになります。いま「此岸」にいる人たちが、将来極楽浄土に行けるように、直接西方浄土の人々やご先祖様に「牡丹餅」をお供えすることで布施波羅蜜になると考えられていたようです。

2つ目の説は、「あんこ」と「お米」を合わせることが、先祖に「心を合わせる」と繋がっているからというものです。おもちはお米から作られる五穀豊穰を象徴する食べ物ですし、小豆は節分の時にまかれることなどから見ても、魔除けに通じることもあります。どちらも日本の行事、特に農業に関する行事や節句には欠かせないものですね。また、今と違って昔は甘いものが貴重だったため、牡丹餅といえばご馳走で、法要の際にも必ずお供えしていました。そのことから、この縁起の良い2つを合わせて、「牡丹餅」としたというように言われています。

3つ目の説は小豆の赤色には災難から身を守ってくれる効果があるからというものです。おもちを小豆で作った赤い色は「邪気を払う」とされています。それならば「あんこもち」にすればよいのですが、西方浄土にお供えするというので、このお彼岸の季節を代表する赤い花、「牡丹」を冠してお供えしているのです。なんととっても、お花と食べ物、そして魔よけ、すべてを兼ねているのがこの「牡丹餅」なのです。

ちなみに、「牡丹餅」も「お萩」も同じものですが、春のお彼岸に食べるのが牡丹餅で、これは「こしあん」にするそうです。これに対して「お萩」は、秋のお彼岸にお供えします。これは「つぶあん」です。春は、「まだこれから穀物を育てます」という意味で、あまり粒を表に出さないということのようです。対して秋は収穫を感謝する意味があるので、収穫の報告の意味を込めて、粒を残すということだそうです。

この牡丹餅は、宮中ではしっかりとお重に入れられて、出されたそうです。「牡丹餅」というような言い方ではなく、当時の女中言葉で「おぼた」という言い方あまづらで親しんでいたようです。

また昔は、甘いものは非常に貴重でした。ですから水あめや甘蔓あまづらなどを使って甘みを出していたようです。それでも、当時は甘いものは非常に貴重品です。ぼたもちといえどご馳走で、大切なお客様、お祝い、寄り合いなどでふるまわれ、「おもてなしの品」という感じがあります。そのもっとも貴重なものに、季節を代表する花の名前を付けてお供えをしたのです。

5 お彼岸の始まりと庶民の中のお彼岸、そして今は

では、この「彼岸」いつから始まったのでしょうか。

お彼岸は、古くは聖徳太子の時代に始まったというような話があります。これは、『今昔物語』の中に「天王寺の西門に、聖徳太子は自ら釈迦如来転法輪処、当極楽土東門中心とお書きになりました。そこで、天皇・公家・お坊さん・民衆にいたるまで様々な人が西門で阿弥陀様の念仏を唱え、今日まで絶えることなく、お参りしない人はいない」と、書かれていて、聖徳太子の頃から“お彼岸”があったと言われているのです。しかし、これは後の世になって『今昔物語』という説話集に書かれたものであり、実際に聖徳太子がこのようにしたのかは不明な部分があります。

記録に残っているのは、『日本後記』が一番初めです。「延暦二十五年三月辛巳の条」要するに西暦806年(大同元年)「奉爲崇道天皇。令諸国国分寺僧春秋二仲月別七日。讀金剛般若經」とあり、崇道天皇(早良親王)の供養の為に諸国の国分寺の僧を集め、法要をしたことが記され、彼岸のはじまりとする説が有力です。平城京からの遷都先であった長岡京の造営責任者である藤原種継が781年(天応元年)に暗殺されてしまいます。この時に桓武天皇の即位と同時に立太子されたのが早良親王ですが、この暗殺事件に連座していると疑われてしまいます。この疑いに伴い、太子として廃おとくにでらされ、長岡京を造営した際には都の地鎮として大規模に増築された乙訓寺に幽閉されてしまいます。

早良親王は、自分の無実を訴えるために絶食して、淡路国に配流の途中、河内国高瀬橋付近で力尽きて死んでしまいます。

しかし、その後、桓武天皇の第1皇子である安殿親王(後の平城天皇)の発病や、桓武天皇妃藤原旅子・藤原乙牟漏・坂上又子の相次ぐ病死、桓武天皇・早良親王生母の高野新笠も病死してしまいます。市中には疫病が流行し、長岡京には死体が積まれてしまうというような悲惨な状況になり、また都近くでは洪水などが相次ぎ稲作も不作となってしまいます。後の菅原道真の時もそうですが、このような「悪いこと」が続くと、「無実の罪で死んだ早良親王の祟り」であるとして噂が流れるようになります。早良親王が太子であったことから、その名誉を回復するために崇道天皇として即位したことにしてしまい、また、この祟りがあるということで、桓武天皇は、出来立ての長岡京を捨てて平安京、今の京都市に遷都しなおしてしまいます。

そのような崇道天皇となった早良親王の怨霊を鎮める儀式の1つとして806年に、「お彼岸」が行われたとされています。ちょうど早良親王が幽閉されていた乙訓寺は、今でも「牡丹寺」として有名です。そのような由来もあって、あんこでくるんだ餅を「牡丹餅」というのかもしれない。

さて、このように供養などの意味を持って行われることが多く、そのために、お寺などに関連して様々な記録になります。平安時代には「彼岸」という言葉も普通にあったようで、「秋の彼岸」ですが源氏物語の第二十一帖「乙女」の第7章第5段は「彼岸のころほひ渡りたまふ。」という文章から始まっています。秋の彼岸のころ源氏一家は六条院へ移って行った、という話で光源氏が愛する女性たちを1カ所に集め、一緒に暮らしたいと、京都の六条京極あたりに六条院といわれる新しい邸に引っ越しお話です。このように季節を言うのに「彼岸の頃」というような言い方が普通になっていましたから、平安時代には、すくなくとも京都では一般的に「お彼岸」が行われていたのではないのでしょうか。

これが庶民の中に入ってくるのはやはり江戸時代です。ですから「彼岸」という言葉が使われる有名なものは和歌よりも俳句が多いのです。やはり江戸時代に、貴族の文化が徐々に武士の文化、そし

て庶民の文化として定着してゆくのです。その中で「お彼岸」も庶民の文化や風習の中心になってゆくのです。

みょうぶ
命婦よりぼた餅たばす彼岸哉 蕪村 「蕪村句集」

命婦というのは、稲荷神の使いの狐のことを言います。今でもお彼岸に稲荷寿司を食べる習慣がありますが、蕪村は、「狐の稲荷」よりも「牡丹餅」を重視するというような感じでしょうか。「命婦」という言葉で「狐の使い」要するに「稲荷」よりも、お彼岸の主役はやはり「牡丹餅」であるという様な感じになっています。もちろん、「命婦」というような書き方から、神社の女官などを連想するようなこともできますね。与謝蕪村らしい、さまざまな意味合いを入れた非常に工夫したつくりの俳句になっています。

このように、与謝蕪村などが、さまざまにお彼岸を「庶民の文化」として書いてくれているために、お彼岸は一気に庶民の文化になります。牡丹餅ではなく「稲荷寿司」や「海苔巻」などを食べるというようなこともあります。稲荷寿司は「稲がなる」ということですから、当然に、五穀豊穰の祈りになります。そのような意味合いが、入ってくるようになるのです。

毎年よ彼岸の入に寒いのは 正岡子規 「寒山落木」

これは、正岡子規らしい句です。「母の詩、自ら句となりて」という前書きがあるように、亡きお母さんの生前の口癖がそのままこんな句になってしまったというのです。この句ができたころは、陸羯^{くがかつ}南^{なん}に誘われて「日本」という新聞で俳句を連載し始めたころのことです。お彼岸が「お墓参り」または「西方浄土と対話する」ということから、亡くなった母との思い出を句にしたのです。「お母さん、お彼岸だというのに寒いなあ」というと「あら、毎年のことよ」と何気なく答える母、そのような日常を描いた、まさに「暑さ寒さも彼岸まで」と言いながら、その最後の寒さを日常として受け止める「母の強さ」と、そう言いながら家族のために働く母の強さを詠んだ句ですね。

このようにお彼岸は徐々に庶民の中に入り、故人を偲びながら牡丹餅を食べて供養をする、そのような文化がついてきました。

しかし最近では、春分の日が祝日であり、ちょうど春休み中であることから、どうしても「墓参り」や「彼岸会」ではなく、行楽やレジャーになってしまうようです。秋の彼岸に至っては、春のゴールデンウィークに対抗してシルバーウィークなどといわれ、長期の連休の一つになってしまっています。そもそも「お彼岸」という言い方もなくなってしまっています。もう一度「お彼岸」の意味を考えて、心静かに、先祖のことを、そして自分を育ててくれた人のことを考えてみる日にしてはいかがでしょうか。